

# インサーン(INSAN Iraqi Society) <活動報告書>

ラパリン地区における子どもたち対象の

ソーシャルアートアクティビティを通した平和づくり

(Promoting peace building in Rapareen through social art activities with children)

プロジェクト地: イラク共和国キルクーク県キルクーク市ラパリン地区

期間: 20012 年 6 月-7 月

## I. プロジェクト紹介

INSAN Iraqi Society(以下、インサーン。アラビア語で「人間」という意味)は、キルクーク県のラパリン地区、パンジャ・アリ地区、ハリーヤ地区にて 2008 年 9 月より精力的に活動が続けている。これらの地区は、様々な民族が混住する地域であり、民族グループ間での緊張が顕著である。コミュニティ内で平和構築を促し、平和的共存を確実にするために、インサーンは参加型の開発アプローチを展開してきた。このアプローチは、異なる民族の代表者や一般の人々が多様なアクティビティを通して交流する機会を設け、関係や絆、共に未来を切り拓くためのビジョンの醸成を促進している。

JVC のサポートを得てインサーンは、2009 年 12 月に 8 歳から 12 歳の子どもたち 40 人を対象にアートセッション活動を開始した。キルクークの各民族の代表として選ばれた子どもたちは、8 週間にわたり週 2 回集まり、平和に関する工作などのアート活動(アートを通したアクティビティ)を行った。

参加した子どもたちどうしおよびそのコミュニティ内に良好な関係が築かれたことが確認でき、2010 年冬にも同様のアートセッション活動第 2 フェーズを実施した。民族的背景の異なる 3 つの地区から集まった子どもたちに、計 16 回にわたるアート活動を通し、平和・寛容・人権などの概念を伝えることができた。

異なるコミュニティ間で関係性が強まったことが確認でき、2011 年 7 月から 9 月にかけて第 3 フェーズとして同様のアートセッション活動および音楽セッション活動を実施した。8 歳から 12 歳の子どもたち 60 人が 7 週間にわたって週に 3 回集まり、アート活動のほか音楽や演劇の 21 のセッションに参加した。すべてのセッションは、平和と寛容をテーマにしていた。

コミュニティおよび地元当局の要請により、2012 年 2 月から 3 月にかけては、第 4 フェーズを JVC の支援により実施した。8 歳から 12 歳の子どもたち 45 人が、7 週間にわたり週に 3 日集まり、アートアクティビティ、紛争解決(conflict resolution)に関するキャパシティビルディング(能力向上)のアクティビティ、寸劇に参加した。これらはすべて平和、共生、寛容、紛争管理(conflict management)に関することをテーマとしていた。

そしてインサーンは再び、2012 年 6 月から 7 月にかけて子どもたちを対象に 5 回目のアクティビティのシリーズを実施する機会を得た。8 歳から 12 歳の子どもたち 30 人が、1

か月以上にわたり週に3回集まって、アートアクティビティ、紛争解決(conflict resolution)に関するキャパシティビルディングのアクティビティ、コンピュータや寸劇を使った平和メッセージなどの活動に参加した。いずれも平和、寛容、紛争管理(conflict management)に関することをテーマとするものである。今回は、まず初めに子どもたちの保護者を集めて導入のためのセッションを開き、アクティビティの目的を説明するとともに、対象とする3つの地区(ラパリン、ハジャル・アスカリ、Al Asrawmafqoodeen)どうしの繋がりができるように配慮した。

セッションの最後には、子どもたちの家族やコミュニティの人々も参加して、キルクーク・カテドラル教会にてお祝いの会を開いた。子どもたちは、アクティビティで作ったアート作品を発表したり、紛争解決に関する寸劇を発表したりした。

また、保護者に紛争解決について問題提起することの重要性から、保護者(特に母親)を対象に子どもたちと同様にコミュニティ内の紛争処理に関する2コマのセッションを行った。

## II. 実施経過

### 1. 参加者の選定

ラパリン、ハリーヤ、アル・ナスルの3つの地区にある22の学校から、インサーンのアクティビティへの参加者を募集した。各学校の校長先生とミーティングを持ち、アクティビティについて説明し、参加者を選定していった。

校長先生たちは、アートアクティビティに参加する子どもたちを選び、保護者の同意を得ることを通してこの活動に参加することができた。そして、様々なクラスから異なる背景の子どもたちのリストをインサーンへ提供した。インサーンは、3つの地区でチラシを配ったり、会場となるコミュニティセンターに横断幕をかけたりにして、アクティビティについて告知した。

更にインサーンは、男女比率や出身地のバランスを考慮した上で、候補者を絞りこんだ。

子どもたちの選定は、下記の通り行われた。

- ・女子4人 男子26人
- ・クルド人12人 アラブ人12人 トルクメン人10人
- ・ラパリン地区から14人 ハジャル・アスカリ地区から8人  
Al Asrawmafqoodeen 地区から7人 ハリーヤ地区から3人  
パンジャ・アリ地区から2人

### 2. ロジスティクス

インサーンがバスを借りて、子どもたちの送迎をした。バスの定員は20人で、3つの地区からの参加者を送迎するために毎日3往復する必要があるがあった。

会場は、キルクーク・アル・サラームセンターとした。

### 3. 手工芸アート(manual art)セッションの実施

キルクーク・アル・サラーム職業訓練センターにて、1回約3時間のアートセッションを週に3回、計10回実施した。また、コミュニティおよび保護者の要望によりコンピュータについてのセッションを2回実施し、合計12回のセッションを実施した。これには、キルクーク市内のバワゴルゴル公園での野外活動も含まれる。

12回のセッションは、下記のように行われた。

#### JVC 第5回ワークショップ

第1セッション:2012年6月12日-

##### 1. 参加した子どもたちの紹介

(名前、年齢、学校、学年、趣味など)を絵/写真と共に作成

##### 2. お互いに知り合うためのアクティビティ

第2セッション:6月13日

#### 平和の地図アクティビティ、3つの地区を描く:

子ども達は、一人ひとり自分が住んでいる地区の地図を思い浮かべ、A3用紙に描いた。更に、自分の地区の絵に名前、地区名、年齢を加え、同じテーブルの子どもに見せた。子ども達は、3つの地区を繋ぐ平和の橋という概念を創り、地図の上部に「橋をかけて会おう」という言葉を書いた。

このアクティビティの目的は、子ども達が、異なる地区の子どもを友人として受け入れて、地図上の土地で共存できるようになることだった。3つの地区の地図は、皆をより幸福にし、同じコミュニティで平和を享受するために役立つ平和の概念を使い、彼らの関係をより明確にした。アクティビティを通し、子ども達はコミュニティの中での「平和の使者」としての役割について自覚を持つようになった。

第3セッション:6月17日

このセッションでは、子ども達に「トム&ジェリー」の平和条約の映像を見せて、紛争や平和の意味について考えさせた。子ども達は、紛争の意味や原因、平和という目的地に辿り着くことで得られる幸せについて理解を深めた。

また、子ども達は、ファシリテーターが下記の言葉を書いたアクティビティでも様々なことについて学んだ。

1—「公正が、平和の基本」

2—「私たちは、紛争と平和の意味について学んだ」

3—「取り決めに尊重し、自分の言葉に責任を持とう」

4—「預言者の言葉にあるように、友達や兄弟を愛そう」

5—「失うものが多いから、争うのはやめよう」

6—「他人と分かち合うのは、悪いことではない」

7—「欲深くならないように。神様は欲深い人をよく思わない」

次のアクティビティでは、ビーズを字や絵の形に、ボンドでガラスや鏡に貼付けた。このアクティビティで子ども達は、絵の中に平和のシンボルを使うことで、JVC やインサーンがキルクークの子供達のためにこれらのワークショップを開催する目的を表現した。子ども達は(複数のワークショップに参加した子ども達が特に)、手工芸やゲーム、友達との遊びを全て平和に基づくものにできるようになった。

#### 第 4 セッション:6 月 18 日

このセッションのテーマは、「子どもの権利」だった。世界人権宣言に基づく「子どもの権利」や「人権」について理解を深めてもらうために、アラブ人権協会が制作したドキュメンタリー映画を見せた。

ファシリテーターは、映画の中から権利に関するフレーズを拾って紙に書き、参加者をいくつかの班に分けて、紙切れに記載した文字を人権に関係する単語やフレーズになるように並べるゲームを行った。一番多くの単語やフレーズを集めた班が勝つというゲームである。

班に分かれた子ども達に、A3 用紙 1 枚とアラビア文字が記載されてある小さい紙切れが配られた。5 つの班は、紙切れの文字を 10 分間で一番速く人権に関する言葉やフレーズに並べ上げるかを競った。第 1 ラウンドでは、10 分間で並べ終えた言葉とフレーズを集計した後、全ての班が同じ点数になったことが判った。第 2 ラウンドでは、2 つの班が最高点を獲得した。

ファシリテーターが、負けた班の子ども達に感想を聞いた。「勝った班は嫌いですか」と聞いたところ、「嫌いではないし、次は勝つためにもっとがんばる。私達は友達だし、これはただのゲームだ」と返事が返ってきた。

次のアクティビティでは、「子どもの権利」を絵にした。ファシリテーターは、子ども達に人権を表現する自分なりの絵を描かせた。

このセッションでは、子ども達は自分達の権利について理解を深めることができ、友達とゲームを楽しむことができた。何かアクティビティや歌を発表したいか聞いたところ、子ども達は歌が歌いたいと答えた。子ども達は、学校で習った人類への讃歌を歌い、イラクについての詩を朗詠した。子ども達は、才能に溢れ、歌うことで社会を変えたいという気持ちを持っていることが窺えた。

#### 第 5 セッション:6 月 19 日

このセッションでは、キャンディーの容器と布で宝石箱を作り、アイスクリームやキャンディーの空き箱のリサイクル方法について学んだ。

ファシリテーターが、食べ物や飲み物の空き箱や缶をリサイクルまたはリユースすることにより環境を美しく健全に保つことの重要性を説明した。

子ども達にこの箱作りをさせる目的は、自分とは違う価値観でも、尊重すべき価値に目を向け、他人にとって大切なものを自分たちの大切なものと同じように扱うことを学ぶこ

とである。ファシリテーターは、多様な民族が暮らすキルクークの住民たちがお互いのコミュニティを尊重し合うことで平和に暮らしていけることを説明した。

ファシリテーターは、プラスチックのアイスクリーム容器と布、糊を使って箱を作り、仕上げに飾りをつけるやり方を見せた。

ラパリンのアラブコミュニティ出身の少女エルサーと、同じくラパリンのクルドコミュニティ出身のファティマと一緒に歌を歌った(2人とも小学6年生)。アマル・アジーズ(同じくラパリンのアラブコミュニティ出身の小学6年生)がイラクを題にした詩を朗詠した。子ども達は、友達のパフォーマンスを楽しむことができた。

## 第6セッション:6月24日

このセッションは、電源の入れ方と消し方など、コンピュータの使い方についてだった。ファシリテーター(ライド)は、子ども達を5つの班(一班8名)に分けた。初めに、パワーポイントを使ったプレゼンでデスクトップパソコンのシステムや、ケースや画面、マウスやキーボードといった部品について説明した。ファシリテーターは、コンピュータの操作方法や消し方を説明し、子ども達にとってのコンピュータの正しい扱い方にも言及した。

初めのセッションでは、子ども達がコンピュータを楽しく使う様子がみられた。中には貧しい家庭出身の子ども達もいて、彼らにとってはマウスに触るのが人生で一番幸せな瞬間になった。コンピュータを初めて使い、メッセージの書き方を学んだ子ども達は、お絵描きの時間中もコンピュータ室に戻って学んだことをやってみたくてたまらない様子だった。

ファシリテーターは、子どもたちが学んだ理論を実践するために、初めの班をコンピュータ室に連れて行った。一方、芸術学科卒のボランティアであるアリ・マスードは、他の子ども達にコンピュータを使った絵の描き方を教えた。

過去のワークショップ後の評価で、アートよりコンピュータの方が実用的だという保護者の強い声から、インサーンは、コンピュータのセッションを2回行うことにした。今年度のワークショップへの参加を確保するため、インサーンは、コンピュータについての指導も加えることを明らかにした。そこでインサーンは、いくつかのトラブルに遭った。

- 参加者の子ども達の年齢では、使い方を知らないまま、ただコンピュータに触ることに夢中で、指導が困難だった。対策としては、コンピュータの先生のライド氏にサポート役として、数人のボランティア及びファシリテーターをつけた。
- コンピュータの台数より参加者数が多く、2つに班分けする必要があったため、それぞれに教えるには2日では足りないことが判った。保護者もセッションの増加を望んでいた。インサーンは、対策として参加者を2つに分けることにした。片方のグループが、コンピュータ室で学んだスキルを応用している間、もう片方のグループは、ファシリテーターのアリ氏の下で図画の基本を学習することにした。
- コンピュータのスキルを高めるには、セッション後に参加者が自分でコンピュータを使ってみる必要がある一方で、子ども達の多くは自宅にコンピュータがない。そこで、(インサーンの)ラパリン地区コミュニティセンターを終日開放し、参加者がセッションの後にも自由にいつでもワークショップで学んだことについて質問できるようにした。

## 第7セッション:6月25日

ファシリテーターは、コンピュータを使うことで生活を簡略化・迅速化し、上手に整理できることを説明した。

ファシリテーターは、Microsoft オフィス (Microsoft ワード) の使い方から始め、子ども達にワードの開き方及びコンピュータでの文字や単語の打ち方を教えた。子ども達が真っ先に打ち出したのは、自分たちの名前や地区名、友人の名前だった。キーボード上の文字の位置を覚えるために、いくつかの簡単なフレーズも打ってみた。キーを打ち、画面に文字が現れるのがとても楽しく、子ども達はとても楽しそうだった。

ファシリテーターは、子ども達に世界中の他の子ども達へメッセージを書くよう伝えた。皆、様々なスキルや役に立つことを楽しく学ばせてくれた JVC への感謝を自分たちなりの簡単な言葉で表現しようとした。

学校では、機器や電力の不足でコンピュータについて勉強できない中、子ども達はコンピュータが現代的な教育の方法だと学んだ。コンピュータとプロジェクターを使ってテーマを大きく表示することができ、コンピュータがあれば道具の取り合いなどでけんかして叩いたりどなったりするより簡単なことを知った。

子ども達は、翌日またセンターに来ることをとても楽しみにしていた。次のセッションは、外での「スポーツを通しての平和構築」だったからである。公園への遠足に、スポーツウェアを着てくるとはしゃいでいた。子ども達は、このプロジェクトの中でスポーツ、アート、コンピュータスキルに触れることができるとも楽しんでいた。あとは、英語のスキル向上のプログラムがあるとよいが、それは(次に)残された夢である。

コンピュータで書いたメッセージは、様々な内容があった。以下、ファティマ・ユースフのメッセージでは、JVC の活動に感謝を表している。自宅にコンピュータはあったものの、使い方を知らなかったため、ワークショップで Microsoft ワードの使い方を身につけて、初めて書くことのできたメッセージだった。

これら2回のセッションを通し、彼女はコンピュータを使って書くことを学ぶことができた。

コンピュータを使ったぬり絵が大好きな子ども達の人数に対しコンピュータの台数が足りない中、ファシリテーターが対策としてある提案をした。一人が好きなアニメのキャラクターの色を塗っている間、班の他の子ども達は自分の番を待つことにした。

## 第8セッション:7月1日

このセッションでは、バワゴルゴル公園へ遠足に行き、外でスポーツを楽しむ予定だったが、公園を午前中開放する当局の許可が遅れた。結果、このセッションは最終日に延期し、当日は以下の活動を行った。

### 子どもの日・子ども達の夢と心配事を絵にする

初めに、「世界子どもの日」について説明し、その祝日がいつか(11月20日)を教えた。ファシリテーターは、この祝日の意義や、世界中の子ども達がお互いの成功を祈り、平和的な環境で生活することを目指して夢を共有し、夢のある未来を持つことについて説明した。ファシリテーターは、子ども達に目をつむって自分の夢を表現するイメージを描くように言った。石油が豊富なキルクークという町に暮らすイラクの子どもにとって、最も大切でかなえない望みは何だろう？誰がその望みを叶えてあげられるのだろうか？

ファシリテーターが手伝って、子ども達はイラクとキルクーク市の地図を描いた。この地図では、石油を象徴する「永遠の炎」が重要な位置を占めていた。

子ども達は、サッカーボールやコンピュータ、自転車等が欲しいと自分たちの無邪気な夢を描いた。

子ども達のうち一人は、「自分の街が庭園のようにきれいになり、花々に満ち、友達と遊べる環境になってほしい」と言った。もう一人は、「学校に校庭ができ、友達とサッカーをすることが夢」と語った。

セッションの後半では、ファシリテーターは、子ども達に自分達の心配事を絵に描くよう促した。彼女は、誰にも心配事や怖いことはあり、恥ずかしいことではないから恥ずかしがらないでと伝えた。子ども達は、暗闇や犬、幽霊を描き始めた。幽霊の絵に関してガッサンは、「電気を消すと幽霊が見える」と説明した。彼はこのような恐怖に悩んでおり、それが彼の性格を不安定にし、学校での勉強にも悪い影響を及ぼしている。彼の手首には、布が巻いてあった。彼によると、シェイク(族長)から悪霊除けのお守りとしてもらい、家族が巻いてくれたのだ。

そこでファシリテーターは、彼が自信を持って安心できるようなアドバイスを試みた。以下の写真は、子ども達の心配事や夢を表現している：

- ・(クルド系の子ども)彼は、蛇が恐く、自転車を持つ夢がある。イラクの地図をイラクとクルド地域の2つに分け、自分をクルド地域のところに描いた。
- ・(エルハム・タレック)彼女は、トルクメン系としてのキルクークを表現した。キルクークはトルクメンの都市だから、この先もキルクークに住むことが夢と述べた。家族と暮らしたいという夢の他、犬が怖いということを描いた。
- ・(ムアヤッド・サイド)彼は自分の家と車を持つことが夢だが、心配事・怖いことについては触れなかった。
- ・ガッサン君は、幽霊が怖く、将来自分の庭が欲しいと述べた。

第9セッション:7月2日

## 日本の日

セッションは、日本についてのプレゼンテーションで始まった。日本地図や世界の中の位置、自然、教育システム、料理、住居、文化、一番人気のスポーツ、国旗などを取り上げた。プレゼンテーションは、プログラム・コーディネーターがアラビア語とトルクメン語で行い、クルド語への通訳は、ファシリテーターのナーラさん(女性)が行った。

着物を着た日本人の女の子の写真を見せ、日本の式典等で女性が着ることを紹介した。着物の布を試しに触らせてあげたら、子ども達、特に女の子は大喜びだった。ファシ

リテーターは、着物は、イラクでもクルド、トルクメン、アッシリア、アラブなど自分たちが結婚式などの機会を着る伝統的な衣装のようなものと紹介した。どの国にも、環境や気候、自然、彼らの属する場所によってそれぞれに伝統的衣装があると説明を加えた。

ファシリテーターは、子ども達に日本の女性が使う扇子を見せて、説明した。日本では、女性が持ち歩いていることも加えた。更に、紙を折って作る方法も教え、日本の芸術家が表面に自然の風景を表す美しい絵を描くことを説明した。子ども達は、4人ずつの小さなグループに分かれ、ファシリテーターに教わった手順で紙の扇子を作った。子ども達は、扇子にイラクと日本の国旗、真ん中に平和のシンボルを描いた。

ファシリテーターは、子ども達に日本の提灯を見せ、紙で作る方法を教えた。また、日本の提灯と、イラクでラマダン中、夜中に礼拝と断食前の食事への呼びかけがされる時に灯されるランタンとを比べた。紙を2回折り、4,5回切込みを入れた後に広げると、提灯の形になる。また、紙ではなくアルミニウムで作り、中にろうそくを入れるとランプとして使えることも紹介した。

2番目のセッションは、日本の国旗の描き方についてだった。ファシリテーターは、赤と白の色紙を糊で貼り合わせて日本の国旗を作る方法を説明した。

子ども達は、新しい国や文化を知ることができ、特別な一日だと感じているようだった。日本について幾つも質問をし、日本の子ども達についても知りたがっていた。「僕/私達の学校やこのワークショップに来てもらったり、イラクについて知ってもらうために一緒にキャンプに行ったり、日本に行ってみたりしたい」と言っていた。

暑さに負けず、ワークショップを支援する JVC への感謝の気持ちを込めて、日本の国旗を見せながら、記念写真を撮った。

## 第 10 セッション:7 月 3 日

### 寸劇「遊びと勉強」

このセッションは、子ども達による寸劇を通して「紛争解決(conflict resolution)」を取り上げた。ファシリテーターは、シナリオを子ども達に説明し、父親役、母親役、息子役、その友人達の役を演じる役者を選んだ。

ファシリテーターは、各登場人物の役割を読み上げ、子ども達に練習させ、指導を行い、アドバイスをした。

<シナリオ>

役者 1(ムハンマド):お母さん、友達とサッカーしに行ってくる。

役者 2(父):行っちゃダメだ。

ムハンマド:お願い、もう約束してるんだ。行かなきゃ。

父:もうすぐ試験なんだから、勉強しろと言っただろう。

(ムハンマドは、ドアや椅子を蹴飛ばしながら自分の部屋に入り、しばらく考え事をする。

1. こっそり行っちゃおうか・・・いや、そうしたら怒られる。
2. いいよ、勉強しない・・・いや、そうしたら試験に通らない。
3. やっぱ、もう一度父さん、母さんと話してみよう。



(ムハンマドは、部屋を出て両親と話しに行く。冷静さを取り戻して、よく考えることができる。)

ムハンマド: えっと…お父さん、試合は2時からで、4時には終わるから、家には4時15分までに帰ってくるよ。約束する。その後は勉強するから。お父さん、お願いだよ。

役者3(母): ねえ、ムハンマドは約束しているんだから、行かせてあげてよ。

(父): じゃあ、約束するな。

(ムハンマドは試合に出ることができ、帰って来たらシャワーを浴び、勉強を始め、宿題を終えた。しっかり予定を組み、勉強と遊びを両立したので、何の問題もなかった。)

\* \*

ムハンマドは、友達に帰ると伝える: じゃあね、もう帰るよ

アリ(友達): どこ行くんだよ。もう1試合やっていこうぜ。

ムハンマド: いや、親に約束したから帰らなきゃ。来週試験があるから、帰って勉強しなくちゃ。

アリ: まだ1週間あるじゃないか。

(アリは、日が暮れるまで遊び続け、家に帰っても疲れたため勉強をせず寝てしまう。)

\* \*

中間試験の結果発表があり、ムハンマドは合格するが、アリは不合格になる。

ムハンマドはアリに結果を聞くが、悲しくて、家に帰って父に言いたくない。

ムハンマドは、自分が実践したやり方をアリに勧めた。

ムハンマド: アリ、もし試験の合格とサッカーをどっちも両立させたいなら、僕みたいに予定を組まないでだめだよ。まず、両親に不合格の現実を受け入れてもらって、それから「紛争解決」のステップを同じように進めていけばいいよ。

\* \* \* \* \*

大半の子ども達がこの寸劇に参加し、演劇、舞台、シナリオ、登場人物、監督、観客などについて学ぶことができた。子ども達はまた、話し合いを通じての問題解決という、互いによりよく理解し合うために他者とコミュニケーションする上で最適な手段について知ることができた。

この寸劇を通して子ども達は、自分たちは遊びたいのに、親が勉強しなさいと言う状況でどのように対処するかを学んだ。

ファシリテーターは、子ども達にグループごとの課題として、「紛争解決(conflict resolution)」のためのヒントについての質問に答えたり、空欄を埋めたりするよう指示した。

第11セッション: 7月8日

友情・寛容・偏見についての物語を、ファシリテーターが子ども達に読んで聞かせた。よりわかりやすくするために、スクリーン上でイラストも見せた。

\*\*\*

サミーは、学校で一番手に負えない生徒で、よく年下の子どもの食べ物を取り上げたり、殴ったりしていじめていた。このような状況が続き、学校中で嫌われ者になっていた。

サミーはそればかりでなく、できの悪い生徒で、遅刻ばかりし、怠け癖と不良行為のため、いつも先生の罰を受けていた。それとは裏腹に、アフメッドは真面目な生徒で、授業にたゆまず励み、先生方や友達に好かれていた。

アフメッドが優秀なので、ある日彼が最高点を取ったときに先生がメダルで表彰した。メダルを首に掛けたアフメッド君は大喜びで先生に感謝したが、サミーはこれが不満で、力づくでもアフメッドからメダルを奪おうと決めた。下校中、アフメッドの道を遮り、メダルを渡せと言った。アフメッドは、「メダルをもらえたのは、僕がやるべきことをやったからだ」と答えたが、結局サミーに殴られ、メダルを奪われてしまった。アフメッド君は、とても悲しい気持ちになった。

数日が過ぎ、サミーは学校を休んでいた。他の子ども達はサミーがいないことを喜んでいたが、アフメッドはサミーのことを心配して、「サミーの家に行ってみた方がいいよ。たぶん病気なんだ」と訴えた。他の子ども達は、「行ってやることはないよ。今だって学校をさぼって遊び歩いているに違いない」と言った。アフメッドが自分一人でも行くと言うと、アメルも一緒に行くと言った。

アフメッドとアメルは、サミーの家を訪ね、お母さんにサミーの欠席の理由を尋ねると、「サミーは病気なの。ひどく疲れていて、ベッドから起き上がれないのよ」と教えてくれて、サミーの部屋へ連れて行ってくれた。

サミーは疲れてぐったりしていて、アフメッドとアメルが部屋に入ってくると、泣き出してしまった。「僕を許してくれ。ひどいことをしてごめん」とサミーは泣きながら言った。アフメッドは答えた。「神様が君を早く健康にしてくれますように。気にするなよ。もちろん許すさ、僕達は兄弟みたいな友達だろ。」

そして、次のような意味のコーランの一節をあげた。

「あなたと他人との対立は、あなたの善い行いが相手に良い影響を与えることで、友情に変えることができる。そして双方が平和に暮らすことができる。」

サミーがアフメッドにメダルを返そうとすると、アフメッドは「返してくれなくていい。メダルを僕達の友情の証しにしよう」と言った。帰路、アフメッドはアメルに言った。「人に事情を聞いたり、話し合ったりする前に、他人のことを判断(偏見)してはいけない。」

## 第 12 セッション: 7 月 10 日

キルクークのバワゴルゴル公園で、ワークショップ参加者のためにアウトドア・アクティビティを行った。

キルクーク市の中心から 5km のバワゴルゴル公園でグループ写真を撮った。3つの地区から子ども達を集め、ホールから出て外で時間を過ごし、楽しむことを目的としていた。

夏季の高温にも関わらず午前という時間設定にしたのは、午後は人が多く、子ども達が迷子になる恐れがあったからだった。

子ども達は、トムとジェリーのオブジェと一緒に写真撮影するのを楽しんだ。子ども達は、トムとジェリーのオブジェを見て平和条約について学んだことを思い出していた。トムのオブジェの頭部が壊れていたので、子ども達は交代で自分の頭を代わりに当てはめて、写真を「完成」させた。

ヘレン・セヤマンドとゼナ・カマランは、もともと友達だったが、ハリーヤ地区での前回のワークショップを通じてより親しくなり、今でも一緒に遊んでいる。

子ども達は、15分間の親睦サッカー試合をしたが、あまりに暑く、怪我や熱射病を避けるために試合を途中でやめなければならなかった。サッカー試合の目的は、仲良く遊ぶということで、ファシリテーターは、ハーフタイムで両チームの選手を交換させ、ウィン＝ウィンアプローチのために子ども達の異なる「コミュニティ」が交流できるようにした。その後子ども達は、公園の一番の人気スポットである「カークラッシュ・スタジアム」に移動した。

その後、女の子が参加できるゲームをした。女の子たちは、男の子たちと一緒にサッカーをすることはできないからである。女の子が2人ずつ競うゲームで、椅子に座り、体を紐で結んで自由に動けない状態で、ボールを所定の方向に投げるといったものだった。計測係が、子ども達が投げたボールの距離を測り、投げた距離が最長だった女の子を勝者とした。このゲームの目的は、紛争を解決する上で大切な、敗北を受け入れる力の習得であった。。

遠足の終わりに、グループ写真を撮った。また、バングラデシュ出身の公園職員の男性が子ども達のサッカーの試合を見に来てくれ、頑張る子ども達を応援してくれた。そして、飲食時に公園を汚さない子ども達の姿勢を褒めてくれた。彼は、「子ども達は同じ民族ではなさそうだね」と言った！プロジェクトのコーディネーターは、プロジェクトと今日の特別な遠足の目的、イラクでの日本の諸団体及び日本人の役割を説明した。彼女はさらに、互いを受け入れ、対立のない社会をキルクークに作るためにコミュニティを交流させていることについて話した。

公園職員の男性は、インサーンや JVC の世界の子ども達に対する活動に感謝を表してくれた。

### **修了式:**

修了式は、インサーン主催で、12日間の JVC 第5回ワークショップの最後に行われた。

アートセッション、コンピュータの学習、バワゴルゴル公園への遠足、ロールプレーを通じた紛争解決能力の向上……いずれも子ども達やその家族を対象にした平和構築を念頭に置いた社会活動の取り組みだった。インサーンは、キリスト教徒とイスラム教徒の間でのいわば融和と文化の交流を図り、お互いを認め合い、平和的共存の概念について学ぶために、修了式をキリスト教会で開催することにした。教会の担当者やルイス・サック司教、彼の代理人などと相談しながら、インサーンスタッフが修了式を計画することができた。

インサーンは、招待状を作り、スタッフとファシリテーターのソーサンさんがそれを印刷し、ゲストに配った。

修了式には、150 人もの参加者が足を運び、下記の方々が列席した：

- ・(会場となるキリスト教会の)ルイス・サック司教代理のアヤッド牧師
- ・地元大学人権課長のサラ・ウレイビー教授
- ・人道対話局長のシェイク・アバッス氏
- ・キルクーク統計局長のアブドゥル・ムイーン・ヒディル
- ・ラパリン地区アル・アスラ・ワルマクディーン・コミュニティ複数の代表者であり Hay Askary のムフタール(代表者)のタリブ・ガリブ氏
- ・トルクメン系雑誌 PINAR の編集者アフマッド・モウ・キルククリ氏
- ・ジャーナリスト組合のアドナン・ラヒーム・アルバヤティ氏
- ・ラバズ・スクール副校長のアヤッド・アドハム・アブドゥウラッ氏
- ・キルクーク農業局員サイド・モウ・ヌーリ氏
- ・その他学校の教員や職員
- ・これまでの全ての JVC ワークショップ参加者とその保護者
- ・教会のサマースクールの生徒と教員
- ・キルクーク衛星テレビ局

修了式は、教会で行われ、イスラム教徒とキリスト教徒の子ども達が知り合いになれる参加型アクティビティを行った。

#### <遊び方>

ラミー氏(教会のサマースクールの関係者)が、子ども達に4種類の果物(オレンジ、ザクロ、スイカ、リンゴ)から自分が好きな果物を選ぶよう呼びかけた。全員選び終わったら、自分と同じ果物を選んだ人を探すよう指示した。但し、イスラム教徒の子どもはキリスト教徒のパートナーを見つけなければならないし、キリスト教徒の子どもはイスラム教徒のパートナーを見つけなければならない。子ども達がパートナーを探しに動き出したところでファシリテーターは、パートナーを見つけたらその人と握手して、新しい友達からできるだけたくさんのごちそうについて聞き出し、その内容を覚えるよう指示した。

ファシリテーターは、各イスラム教徒の子どもが、キリスト教徒の子どもとペアを組んでいることを確認してから、目を閉じて無作為に最初のペアを選ぶと説明した。

ファシリテーターは、最初のペアを選んで、2人がお互いについて知ることができた内容を全員に共有してもらった。更に、短時間で得られた情報の中で何が印象的だったか問いかけた。続いてファシリテーターは、別のいくつかのペアに移ったが、全てのペアへ回れないことを詫言った。ペアとして発表できなかった子も、コンセプトを理解し、異なるコミュニティの友達と知り合うことができた。

イスラム教徒とキリスト教徒、両方がお互いへプレゼントを贈った後、参加者全員がステージに集まって、グループ写真を撮影した。

次に、JVC 第5回ワークショップの参加者に別のプレゼント(バワゴルゴル公園遠足時のグループ写真)を贈った。他のコミュニティの子ども達と共有したアクティビティの思い出とし、ワークショップの目的や、子ども達やその家族の間に生まれた率先する態度や考

え方を忘れないようにするためである。彼/彼女達が、その写真を見てワークショップを思い出し、平和構築という概念が彼らの精神や心に長く留まることを願って・・・。

修了式のアクティビティを終える頃、インサーンのプログラム・コーディネーターは、修了式に参加した子ども達とその家族にキリスト教会の中を案内する許可を教会側に求めた。許可が下り、アヤッド牧師が見学者グループに付き添い、キリスト教について短く分かり易い説明をしたあと、いかなる宗教にも共感するし、またどんな人にも信仰の自由があると述べた。さらに、コーランの「あなた方にはあなた方の宗教があり、私には私の宗教がある」という一節にも言及した。これは、他人の信仰や価値観を受け入れ、他者に特定の信仰や宗教を強要してはならないことを呼びかけるものである。

コーディネーターは子供達に、キリスト教会を訪ねて修了式を教会で行った理由を問いかけた。1人は、「キルクークに共に暮らすキリスト教徒の人を含め、他のコミュニティの子ども達と、修了式を友達同士、兄弟同士のように共有するため」と答えた。コーディネーターは、その男の子の答えを褒め、さらに「治安上の問題でワークショップに参加できなかったキルクークのキリスト教徒の友人達も一緒にプログラムの成功をお祝いできるように、彼らにとってより安全である教会に私達が出向いた」と付け加えた。

また、キリスト教コミュニティに「祖父母の代が語るように、昔この街で今のような境界線もなく平和的に共存した日々を取り戻したい」という気持ちを共有してもらうための我々のプログラムを紹介する意味もあった。さらに、キリスト教徒の人達に、私達のキリスト教徒に対する好意を伝えると共に、本来は恐怖や戦争ではなく平和を意味するイスラムから逸脱して、悪い行いをしている一握りのイスラム教徒に代わって、謝罪をする意味もあった。

子ども達の家族は、教会の中を見て、キリスト教について学ぶことができたことに対し、アヤッド牧師に謝意を表した。

アヤッド牧師は、「私達はイスラム教のリーダー(シェイク)達とよい関係を築いており、彼らがかつて司教 Dr. Louis Sacko を訪ねてきた時に、皆で教会で祈りを捧げた」と述べた。

最後に、コーディネーターとインサーン代表のアリ氏は、修了式はキリスト教会関係者の方々の努力で実現できたと讚えた。

アヤッド牧師も、このイベントへの謝意を表し、キルクークでの平和促進に役立つと信じていると述べた。

教会の行事の管理責任者ラミ氏も「今日が人生で一番幸せな日」と述べ(!)、キリスト教とイスラム教の子ども達が共に参加したアクティビティを大いに楽しんだと述べた。

## 紛争管理(conflict management)ワークショップ:

第5回 JVC ワークショップ参加者達の母親向けに、紛争解決に関する2回のセッションを行った。1回目は、7月16日午後4時から、2回目は9月16日午後5時から、各回とも約3時間続いた。セッションは、母親達の紛争管理・解決のための力を高め、JVCのワークショップで子ども達が学んでくる新しい概念に如何に対処するかを伝えることを目指した。即ち、母親達がかつて子ども時代に学んだ事柄と、今子ども達が人権や平和構築と関わる活動家や組織の下で学んでいる事柄とのバランスを取るための試みだった。

ファシリテーターは、説明した。「共存」とは、習得すべき概念である(訳注:生まれつき備わっているものではない)ため、他人を受け入れる方法を親が自分の子ども達に教える責任がある。子ども達は、初めて親から離れ、保育園や幼稚園、小学校1年生の段階で、同じ教室や先生、更には同じ机を共有しなければならない時に、よい関係を築けず互いを敵視することにより、殴り合いや喧嘩が始まってしまう。

自分の家こそが「最初の学校」であり、生活のルールや他人との共存の仕方、叫んだり殴ったりするのではなく、会話と対話を表現の手段として受け入れることを学ぶ場なのだ。子ども達はそこで、他人と分け合ったり、一緒に参加したりするという概念を身につける。

母親の大半が主婦であり庶民的な地区の出身で教育レベルが高くなかったため、ファシリテーターは、彼女達のために家庭での母親と子どもの関係、1年目時の保育園や学校での先生と子どもの関係をイラストで示した。母親達は、セッション中これらの概念や説明を見たり聞いたりすることができて嬉しそうにしていた。彼女達は、子ども達の学校や家庭でのふるまいや態度、家庭での兄弟姉妹との関係におけるふるまいや態度について、より理解することができた。

ファシリテーターは、子ども達と接するにあたっては、(社会や人間関係の中で)紛争は起こるということを認識し、子ども達から学んだ紛争解決のやり方を用いるよう説明した。

ファシリテーターは母親達に、子ども達が喧嘩してしばらく後に仲直りする写真を何枚か見せて、「子ども達は、なぜ喧嘩するの?」と聞いた。

母親達は、以下のような理由を挙げた:

- ・ 物の奪い合い
- ・ 食卓や車の席の取り合い

ファシリテーターは更に、「子ども達の喧嘩にはどういう背景があるの?」と聞いた。

彼女達は、以下を挙げた:

- ・ 嫉妬
- ・ 男の子が、男として姉や妹に言うことを聞かせようとする

<ファシリテーターにより追加された理由>

- ・ 参加者であるみなさん(母親)の抑圧を感じている
- ・ 両親または片親が留守にしているか、家にいても忙しすぎる

その後ファシリテーターは、喧嘩にも良い側面があると説明した。喧嘩は、子ども達が他者と影響し合い、言葉や話し合いを使って解決に達することを学ぶ良い機会である。但し、大人は介入せず、子ども達が自ら解決に達するようにさせないといけない。こういった場面を通じて、子ども達は、自分の権利の主張の仕方や、他人の持ち物を尊重すること、ルールを守ることについて学ぶことができる。

紛争には、以下の5種類がある：

- ・Relationship conflict(関係紛争)
- ・Information conflict(情報紛争)
- ・Interest conflict(利益紛争)
- ・Structural conflict(構造的紛争)
- ・Value conflict(価値紛争)

ファシリテーターは、子ども達から紛争後の和解について学ぼうと呼びかけた。

子どもは、いつも人生のこの瞬間を生き、楽しんでいて、だから大人と違い幸せなのだ。

保護者向け紛争解決セッションの2回目に、ファシリテーターは紛争のさまざまなタイプについて話をした。預言者ムハンマドに関するひとつの事例を挙げ、「これは価値紛争に入るが、人を殺したり、暴力を振るったりして問題を解決できると思うか」と聞いたところ、母親達はノーと答えた。ファシリテーターは、私達は対話を通して問題について話し合うことができ、たとえ相手に対話の価値を認めないとしても、喧嘩や暴力以外の別の方法を見出すことができると述べた。

ワークショップの終わりに、ファシリテーターが母親たちにいくつかの質問をし、(ワークショップに対する)口頭での評価をしてもらった。

1. こういったプログラムは、コミュニティ内で何かを変えることができますか？  
若しくは、もっとほかの何かが必要でしょうか？もしそうなら、それがどんなことか教えてください。

参加者の回答:このようなプログラムは、もちろん変化を生む力がある。ファシリテーターがトピックを取り上げ、やり方やプログラム全体の実行、その背景にある目的などを説明すると、人々は、自分の課題や問題について考え方を換えられると思う。また、互いのコミュニケーションや理解を強め、平和なコミュニティを築くための一助になる。

2. コミュニティがこのプログラムを支持する可能性はありますか、ありませんか？

回答:ソーサンさん(ファシリテーターの一人)は、次のように述べた:コミュニティの中には、支持したいと考える人たちもいると思う。たとえば Um Malak(Mrs.Fareeda)さんは、ミーティングに参加した一人で、人権擁護の活動家であり、貧困家庭と裕福な家庭の間の仲介を担っている。生活物資の不足で困っている人達に経済的援助も行っている。彼女は、要人とも知り合いであるため、私達をサポートできる。

3. この点について、私達が頼ることのできるどんな可能性や機関がありますか？

回答:

- ・ キルクーク県議会
- ・ キルクーク地区議会議長(Muneer Al Qfeli 氏)
- ・ モスク(社会連帯ボックス「Awqaf」)
- ・ ワークショップにボランティアとして参加した若者たち

4. その他何か提案がありますか？

回答:2003年以降、教育システムが多様化され、それぞれの学校が異なる言語で運営を始めたと共に、それぞれの学校が個々のアイデンティティを示し守ろうとするようになった。これにより、教育レベルが下がってしまった。とりわけ、トルクメン語とクルド語の小学校が、アラビア語での一言語による以前の教育システムの廃止によって悪影響を受けた。アラビア語での教育に戻し、他言語は英語のように第2外国語として教えてほしいと思う。

この件は、市内の人々の間に多くの問題と対立を引き起こした。たとえば、Hai Alaskaryの学校の1つ(Fadhael学校)では、異なるコミュニティ出身の生徒が4交代制で学習しているが、特定の先生とコミュニティの人が、トルクメン人の生徒を追い出してクルド語のみで運営したいと考えているとわかった。保護者の1人が学校を訪問したところ、トルクメン人を学校から追い出す動きへの抗議の意味で、1人の先生が校庭で授業をしていたとのことだった。

トルクメン人追放が成功してしまい、結果50人以上もの生徒が学ぶ場を失ってしまった。最寄りの学校に行けなくなり、さらに、遠くまで通学していた生徒の1人が事故に遭ったため、保護者達が遠い学校に通わせるのを止めてしまったのだ。

保護者達はこの件に関して、住居の近くに学校を造り、ひとつの言葉(トルクメン語)で教えてほしいという要望を、どのように行政に持ちかけたらよいかをNGOに相談して、アドバイスを求めた。

こういった教育システム(教育システムの多様性)は、異なる民族の生徒同士の交流とコミュニケーションの機会を妨げてしまう。

保護者達は、「子ども達の権利を守る人達はなぜいないのか」と尋ねた。



### Ⅲ. モニタリング及び評価

INSAN は、様々な手法を使ってプロジェクトのコミュニティへの影響を評価し、期待された社会的変化をモニタリングした。

例:

- 現場訪問
- 個別インタビュー
- 「変化の理論」方法論
- 最終評価アンケート

#### <インサーンが実践した観察プロセスの要約>

コミュニティの人々に対するプロジェクトの社会的影響に関して:

対象地区の様々なコミュニティ内で、子ども達を対象にしたアートを通しての平和構築プログラムという概念に対して、強い支持があると判った。彼らは、子ども達という新たな世代の力によって社会で平和が広まり、促進されていくと考えている。インサーンは、「主婦」である女性たちを含むコミュニティの人々にインタビューをして、個々の層を分析し、以下の状況が明らかになった。

#### 1. 平和構築における生徒の役割

生徒達の持つ大きな特質は、セッションで身につけた、コミュニティで他人に対応したり他人とコミュニケーションを図ったりするという平和のためのスキルや概念を、クラスメートや先生、地区内の友達、親戚などに伝えることで平和の文化を広めることができるという点にある。従って、とても大きな対象グループに影響を及ぼすことができる。我々の対象グループである「JVC ワークショップ参加者」は、自分達の家族や学校、地区内で平和の構築者になり得る。但し、彼/彼女らの態度や行動についての更なるフィードバックについては、引き続き観察する必要がある。

#### 2. 女性、特に主婦の役割

主婦は、子どもを平和の文化で育てるという点において、コミュニティ内で大きな役割を担っている。彼女達は、平和構築を社会で如何に広めるかを子ども達に教えており、中でもインサーンの紛争管理ワークショップに参加して我々が目指すものの概念を理解した母親達は、特にそうしている。

ラパリンや Al Askary, Al Asra walmafqodeen などの地域には、教育水準の高い女性もおり、彼女達はコミュニティ内で意見を表明する場を比較的多く持っているが、十分な教育を受けていない女性達は、同じ役割を果たすことができない。後者は、自分の子どもの学校の運営会議の他には自分の意見を表明する場を持たない。こういった会議では、差別やその他対立に関する子ども達にかかわる問題を、学校運営側が取り上げれば個別のケースとして議題にすることはできるが、保護者側はそれ以上に定期的な議論をしたり、フォローアップしたりすることはできない。

プログラムに参加した子ども達の「母親」である女性達は、紛争解決ワークショップで様々な問題を取り上げ、議論し、コミュニティで何かを変えることに対して非常に積極的だった。彼女達は、以前は異なる民族と平和に暮らしていたことが記憶にあるからだ。彼女達は、平和こそが最も尊いものと信じており、自分の子ども達に平和の概念を教えたいと思っている。

「母親」である女性達は、普段からインサーンと連絡を取っており、コミュニティを変える方法を学び、そのプロセスを円滑化しサポートしたいと積極的に考えていた。彼女達は、修了式に参加してキリスト教徒の子ども達や牧師に出会い、アヤッド牧師からキリスト教の観点から見た平和について説明を受け、キリスト教コミュニティでの平和構築の進め方について更に知りたいと強く希望していた。彼女達は、子ども達と一緒に修了式を楽しむことができ、わが子らがキリスト教徒の子ども達とアクティビティを楽しんだと言っていた。更に、キリスト教徒の友人達にまた会うか、あるいは教会でのセッションを設定して、平和構築のために同じ立場で共に働きたいと言っていた。

修了式のアクティビティに参加してから、コミュニティの人々はお互いに連絡を取るようになり、電話番号を交換したり会う約束をしたりしていた。インサーンは、特に「母親達」と定期的に連絡を取りフォローアップすることを通して、また家族や教員（インサーンは、教員 14 人から成る「アドボカシー推進委員会」を設立）への訪問を続けて行く中で、彼女達の関係が強化されていくことを目の当たりにした。調査した時点で、45%から 50%の女性達が連絡を取り合っていた。

### 3. 学校の役割

インサーンは、対象地区の 5 つの学校を訪問して、平和構築を促進するための学校における先生の役割を分析した。学校の管理職を訪問し、the director assistant (校長または事務長補佐) の Malika Mohammed 氏にインサーンのセッションが学校の生徒達に及ぼした影響についてヒアリングした。彼女は、紛争解決の新しいスキルを身に付けた生徒達が学校でピースメーカー (平和の構築者) のようになり、クラスメート達にセッションで習ったことやコミュニティの団結について伝えていたと説明した。彼女はまた、子ども達の家族は日々の生活が厳しいため子ども達の話を書く余裕がなく、それが子ども達に影響を与えているとも述べた。

一方、Qishla という学校では、アドボカシー推進委員の一人である英語教員の Azhar 氏にヒアリングをした。彼女は、インサーンのアクティビティについて「目新しい」と述べ、彼女や生徒達にとってこのようなワークショップに参加するのは初めてで、どこの学校にもこのようなものはない、ワークショップに含まれる概念や、トレーニングの呼びかけ方も、生徒達の子どものニーズや要望に相応しいと述べた。

同校の別の教員は、トルクメン人の子ども達の授業を従来の校舎内に戻すキャンペーンを始めた。トルクメン人の子ども達は、別な地区の別な校舎に移されたからだ。彼女によれば、特定の教員が平和や非紛争という概念を省みず、自らの利益を優先して行ったとのことだ。これらは重要な問題で、キルクークの教育局と議論するべく問題提起すべきだと彼女は強調した。

一方、Fadhael 学校の校長(または事務長)の Majed Hameed 氏もこのプログラムやプログラム後の生徒のふるまいについて大いに興味を持っていた。また、インサーンとぜひ連携したいが、NGO との連携を教育省が禁じているため、この概念やコミュニティにとっての重要性を知事に説明し、コミュニティの団結や共存を促進するために、平和構築の分野で活動する NGO と連携することを許可してもらう必要があると彼は述べた。

訪問中インサーンは、いくつかの学校で生徒達の授業を見学し、生徒やコミュニティへのプログラムの影響について質問した。中には、平和の概念について友人や家族に話したり、家族の中の大人に平和構築や紛争解決について説明したりしているという生徒達がいた。Rebaz 学校の Ayad 氏等、平和構築の概念や非暴力の重要性を授業で紹介し始めた教員もいる。彼は、コミュニティでの相互理解や多様性の大切さ、家庭を訪問したり連絡を取ったりすることを通じた社会的統合 (social integration) の重要性について授業で伝えているとのことだ。

インサーンは、平和構築促進に関するコミュニティの変化を、下記の指標を使って測った。

- ・様々な学校や地区内での、JVC ワークショップ参加者間の友情関係が継続しているか
- ・家族同士がお互いを訪問し合ったり、そういった場で様々な課題について話し合いがされたりしているか
- ・問題解決のためにコミュニティと共に行動しているか
- ・コミュニティの要求やニーズに関してアドボカシーを行う推進委員会が、コミュニティ内に組織されたか
- ・コミュニティ内で起きている紛争や平和に関連する問題の解決に向けて、当局関係者への訪問をしているか

#### IV. 影響と成果

- セッションは、子ども達に平和や受容、寛容の概念を紹介し、多様性や他人との違いを重んじることを伝え、力を合わせ何かに成功するために協力や団結することの大切さを教えることが目的だった。プログラムの中で紛争解決の概念も多く取り上げ、子ども達が自らの家庭や学校、コミュニティでの状況について考えるよう働きかけた。

- セッションは、多くの場面において子ども達と相互に働きかけ合うものであり、子ども達に一方的に教えるだけでなく、言葉や絵、劇を通じた自己表現の場を多く設定した。子ども達は、意見やアイデアを述べることを求められた時に、特に熱心に参加していた。また、子ども達にとって、紛争解決に関する自分達の経験について話したり、国に存在する様々な「違い」やそういった大きな問題の解決方法について話し合ったりするのが特に楽しかったようだ。

## V. 困難と弊害

-セッションは夏に実施されたため、暑さによりコミュニティセンターの屋根の下ではなく、ホール内で行わざるを得ないこともあった。また、今回のワークショップには前回の参加者も多数参加したため子ども達の総数が多く、静かな学習環境を確保するために幾つか工夫が必要だった。子ども達を班分けし、各班に名前とロゴを選ぶよう指示した。各班は、段ボールに班の名前を書き、座っているテーブルの上に置いた。また、行儀よくすることを促すため、協力できた子どもには星のシールを配り、それを壁に貼らせた。

-コンピュータ・セッションは、子ども達に一番人気があるセッションの1つだったが、台数が限られていたため子ども達はほとんどの時間コンピュータに触れることができず、コンピュータについての知識を深めることが難しかった。また、子ども達はコンピュータの正しい扱い方を知らなかったため、多くの機器(キーボードやマウス、ハードドライブなど)を駄目にしてしまった。

-プロジェクトチームは、保護者の参加率が低いことについても課題であると感じていた。保護者は、セッションがある日時に合わせて定期的に足を運ぶことが難しかった。また、本来はセッションが始まる前にすべての保護者と顔合わせをしたかったが、保護者達の仕事の都合でできなかった。

## VI. 今後に向けて

-子ども達を3つのグループに分け、子ども達と接する経験がより豊富なファシリテーターの監修の下でセッションを行うのがよいだろう。しっかり学ぶ励みになるように、ワークショップの最後に今まで学んだことについて3つのグループが発表し、競えるような場を設定するのもよい。

-ワークショップ開始前に子ども達の家族を集め説明会を行い、ワークショップセッションの目的や目標について明らかにし、子ども達に教える概念の基礎知識を伝えておくべきである。これにより、保護者がインサーン自体やその活動について親しみを持つと共に、ワークショップで学んだことについて保護者と子どもが話し合うことを、より後押しできる。またこれにより、家族が定期的にセッションに来て参加すること、また第三者として多様な民族間での平和構築を支えてくれることを促進する。

-ワークショップ後の最終評価の過程に実施した、参加者の家族を対象にした現場訪問や個人インタビューは、保護者達のワークショップに対する意見を集めるのに役立った。保護者達からの意見は、ワークショップに関するアイデアの交換およびワークショップの質の向上の助けとなる。

-学校訪問は、平和構築促進における学校経営者や教員の役割および、保護者を通じた子どもやコミュニティの啓発における学校経営者や教員の役割について考える上で役立った。

以上